

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：32406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00544

研究課題名(和文)主節構造と意味解釈のインターフェース：生物言語学的アプローチ

研究課題名(英文) Interfaces of root clauses to their semantic interpretations: A biolinguistic approach

研究代表者

井川 美代子(安井美代子)(Yasui, Miyoko)

獨協大学・外国語学部・教授

研究者番号：90212729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、主節構造に関わる意味解釈の言語間の差、(i) 時制の一致の有無、(ii) 主節の時制形態素の義務性、(iii) 終助詞の有無、(iv) とりたて詞の共起制限などに取り組んだ。初年度には英語の小説とその日本語訳2つでパラレルコーパスを構築し、最終年度には中国語訳2つを加えて、時制形態素の有無に関して異なると考えられるこれら3言語が、共通の時制解釈原理に従うことを明らかにした。また、日本語特有の項省略、「～のだ」構文、間接受動文の理論的研究や節構造一般に関する研究を進め、11の論文、5つの学会発表で成果を公開した。その一部は最終年度の研究報告書にまとめられている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中高の英語文法で英語は時制の一致があるが日本語はないと教える。生成文法研究でも時制の一致操作を仮定し、それがあある言語とない言語という記述をすることが多かった。本研究では日本語には過去時制形態素はあるが、現在時制形態素はないと仮定して、時制の一致の有無は、英語の現在時制形態素がもつ直示性に起因し、英語、日本語、中国語の談話に見られる時制形態素や時制表現の使用は、述語の状態・非状態性を基盤にした語用論的原理に従っていることを明らかにした。その他の日本語特有と考えられてきた構文、現象についても言語が人間という種に共通する能力という立場から再考した。

研究成果の概要(英文)：This research has focused on the parametric variation in the semantic interpretation of root clauses covering (i) the so-called sequence of tense phenomenon, (ii) the obligatory/optional presence of tense morphemes, (iii) the presence/absence of sentence-final particles and (iv) restrictions on focus particles. In the first year, the parallel corpus was assembled from one English novel and two versions of its Japanese translation, to which two versions of its Chinese translation were added later. The three languages differ as to the obligatoriness of tense morphemes and the sequence of tense, but it was uncovered that they are subject to essentially the same pragmatic principle in the temporal interpretation of their discourses. The project also dealt with phenomena specific to Japanese such as argument ellipsis, indirect passives, the no-da construction, and the use of sentence-final particles and focus particles. The results were publicized in eleven papers and five presentations.

研究分野：生成文法

キーワード：時制の一致 時制形態素 取り立て詞 主節構造 ラベル付け 終助詞 極小主義

1. 研究開始当初の背景

本共同研究は、概念・意図システムとのインターフェイスの中核を成す時制、とりたて詞、疑問詞などの解釈を可能にする主節構造および自然言語共通の脳内の言語計算の基盤が一体どのようなものであるのか、という問いを研究テーマとして設定し、生物言語学の進展に寄与することを目的として始まった。本研究は、2013年度から2014年度にかけて行なった獨協大学国際共同研究を土台としている。この国際共同研究では、主節現象とフェイズ (phase) について共同研究者がテーマを設定して研究を行い、その研究成果は主に開拓社から2016年に刊行された著書と2014年度に開催された獨協大学と日本英語学会におけるワークショップで発表した。こうした一連の成果によって、時制の一致が行われない類型的に異なる諸言語 (日本語、中国語、ロシア語、インドネシア語) と英語などの対象研究が可能になり、本研究では、時制を中心に、主節現象の解明に取り組むことになった。

2. 研究の目的

1980年代における生成文法の「原理とパラメータ」の枠組みでほとんど研究が行われず、1990年代以降の「極小主義プログラム」の枠組みでも十分な分析が成されているとは言えない主節構造に関わる意味解釈の言語間の差、特に (i) 時制の一致の有無、(ii) 主節の時制形態素の義務性、(iii) 終助詞の有無、(iv) とりたて詞の共起制限などについて研究することを目的とした。主節 (= 文全体) は言語計算にとって最も重要な単位であり、それが概念・意図システムの入出力となり解釈される。この概念・意図システムが課する「インターフェース条件」と生物学を含む自然科学一般で仮定される原理にのみ言語計算が従うという理論的立場に立ってどこまで (i)-(iv) が分析可能かを追求した。また、(i)-(iv) はすべてCP やvP に関わるという点において、派生途中の出力であると極小主義プログラムで仮定されているフェイズに関して理論的に寄与することも目指した。

3. 研究の方法

研究開始当初に、時制に関して日英語の平行コーパスを構築し、後に中国語も加え、談話の流れの中での時制形態素、時制副詞表現の分布を精査した。研究代表者および研究分担者は、上記「研究の目的」の箇所に示した個別のテーマで本研究を進め、学会や論文で発表した。

4. 研究成果

11の論文、5つの学会発表で成果を公開した。その主なものは最終年度の研究報告書にまとめられている。具体的には、報告書の安井美代子による論文で、時制の一致と二重アクセス読みの

相関関係の説明を試みた。時制形態素の意味を変更するような操作やその操作の有無を言語間のパラメータとして仮定することは極小主義理論では許されない。代わりにGennari (2003) が提案する状態述語が誘発する談話的推論による説明が妥当であることを論じた。さらに、日本語に現在時制形態素がないと仮定することにより、時制の一致と二重アクセス読みの欠如が説明出来るとした。

2 番目の論文では、田中秀和が動詞句や時制節をターゲットにした省略操作が日本語にあるかどうかを論じた。Lobeck (1995) は英語の3つの機能範疇T, C, D が指定辞と一致する構造で、その補部が削除可能と論じているが、日本語にはKuroda (1988) が主張するように限られた一致しかないので、動詞句省略はなく、時制節も「何も」などの否定表現だけが残る場合でのみ省略が可能であることを立証した。

3 番目の論文では、水口学が「節には指定辞が必要である」という、いわゆるEPPの再分析を極小主義の枠組みで行った。Chomsky (2015) は、Tに指定辞がなければTによるラベル付けが不可能になる、と提案し、EPPをTのラベル付けから導くことを試みているが、本論文では、その提案の不備を指摘し、 ϕ 素性が外在化されなければならないという、感覚・運動システム上の要請からEPPが導かれると主張し、その理論的・経験的帰結を論じた。

4番目の安井美代子と浅山佳郎の共著論文は、英語の小説とその日本語・中国語訳それぞれ2つの時制解釈を分析したものである。英語の物語モードの談話では過去時制が首尾一貫して使われるが、その解釈に違いがある。イベント述語文は前文までに確立した参照時に続く解釈となるが、状態述語文では重なる読みとなるのが原則である。日本語訳では後者の場合、非過去が使われる場合があり、中国語でもアスペクト・マーカ―や時制の副詞を使わない傾向が確認された。日本語、中国語に現在時制形態素がないと仮定すると、過去のある時点が参照時として談話で確立しているので、状態述語文に過去時制を使っても使わなくても、英語と同様に参照時に重なる読みが保証されることを論じた。

チョムスキーの日本言語学会での講演を含むここ数年の講演や論文では、統語派生を「作業空間」という新しい概念で捉え、MERGE操作の無制限な拡張を排除しているが、コントロールなどに関する80~90年代の生成文法研究の見直しもしているのが興味深い。Williams (1980) のいう義務的コントロールを受けるPROと名詞句移動で残る痕跡の類似性にKoster (1984) らが注目し、Hornstein (1999) のコントロールを名詞句移動と同様の移動操作で説明するという試みに繋がった。この分析をセータ理論などに基づいて極小主義理論の枠組みで捉え直す方向性をチョムスキーは示している。この報告書に収めた研究代表者および研究分担者の研究も、これまでの生成文法の成果を踏まえつつ、生物言語学の発展に多少とも寄与したと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 安井美代子	4. 巻 38
2. 論文標題 How to license embedded instances of no-da and the politeness marker mas in Japanese: CP recursion or Speech Act Phrase	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics	6. 最初と最後の頁 483-492
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 水口学	4. 巻 (36)3
2. 論文標題 Ways of solving (counter-)cyclic A-movement in phase theory	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Linguistic Research 36.3: 325-363	6. 最初と最後の頁 325-363
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浅山佳郎	4. 巻 13
2. 論文標題 発話において述語 はいくつの名詞句と結合するか 日本語談話における述語句の基本型	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 獨協大学日本語教育紀要	6. 最初と最後の頁 25-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中秀和	4. 巻 1
2. 論文標題 感嘆文の統語論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 統語構造と語彙の多角的研究－岸本秀樹教授還暦記念論文集－	6. 最初と最後の頁 54-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中秀和	4. 巻 96
2. 論文標題 書評：鳥悦郎著『省略現象と文法理論』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英文学研究	6. 最初と最後の頁 140-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hidekazu Tanaka	4. 巻 88
2. 論文標題 Toritate and Functional Categories	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 MIT Working Papers in Linguistics: Proceedings of the 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics 13	6. 最初と最後の頁 301-307
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hidekazu Tanaka	4. 巻 35
2. 論文標題 Fragment Answers with Focus Particles	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of English Linguistic Society	6. 最初と最後の頁 152-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅山佳郎	4. 巻 13
2. 論文標題 発話において述語はいくつの名詞句と結合するか：日本語談話における術語句の基本型	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 獨協大学日本語教育紀要	6. 最初と最後の頁 25-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安井美代子	4. 巻 1
2. 論文標題 Temporal Interpretation and the Strong Minimalist Thesis	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 主節構造と意味解釈のインターフェイス：生物言語学的アプローチ	6. 最初と最後の頁 5-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中秀和	4. 巻 1
2. 論文標題 VP-Deletion, TP-Deletion, and Argument Ellipsis in Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 主節構造と意味解釈のインターフェイス：生物言語学的アプローチ	6. 最初と最後の頁 27-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水口学	4. 巻 1
2. 論文標題 EPP Revisited	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 主節構造と意味解釈のインターフェイス：生物言語学的アプローチ	6. 最初と最後の頁 73-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安井美代子・浅山佳郎	4. 巻 1
2. 論文標題 物語モードの時制解釈の日英中対象研究： 談話表示理論の視点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 主節構造と意味解釈のインターフェイス：生物言語学的アプローチ	6. 最初と最後の頁 103-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 安井美代子
2. 発表標題 Labeling {XP, YP} in Languages Without phi-agreement
3. 学会等名 The 12th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安井美代子
2. 発表標題 How to license embedded instances of no-da and the politeness marker mas in Japanese: CP recursion or Speech Act Phrase
3. 学会等名 The 38th meeting of the West Coast Conference in Formal Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安井美代子
2. 発表標題 Nominal versus Verbal Passive Morphemes: A Micro/Macroparametric Approach
3. 学会等名 International Workshop on Syntactic Analyticity and Grammatical Parameters (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水口学
2. 発表標題 Improper Movement Redux: A Minimalist Perspective on the Old Problem
3. 学会等名 The 2nd Joint Conference of Neo-Grammar Circle and Fukuoka Linguistic Circle (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安井美代子・浅山佳郎
2. 発表標題 日本語の時制解釈と現在時制形態素の有無について
3. 学会等名 日本語文法学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	浅山 佳郎 (Asayama Yoshiro) (60364725)	獨協大学・国際教養学部・教授 (32406)	
研究分担者	田中 秀和 (Tanaka Hidekazu) (70750983)	岡山大学・社会文化科学研究科・教授 (15301)	
研究分担者	水口 学 (Mizuguchi Manabu) (90555624)	國學院大學・文学部・教授 (32614)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------